

ルイス・ファラカンの政治的非一貫性 —1984年と2008年のアメリカ大統領選挙から—

山下壮起
同志社大学大学院神学研究科

要旨

ネイション・オブ・イスラーム（以下 NOI）は、ブラックナショナリズムを基盤にした教義と指導者ルイス・ファラカンのカリスマによって、現代の黒人社会において影響力を持っている。1984年の大統領選挙をきっかけに、NOIは大きな転換を見せた。それまで批判してきた黒人教会と連帯することで黒人社会への影響力を強化し、アメリカ政治に積極的に参与するようになったのである。

黒人社会の支持を獲得したファラカンは、ブラックナショナリズムのリーダーとして黒人社会の感情に即した政治的終末論を展開してきた。しかし、彼の終末論は、時代によってその内容に非一貫性が見られる。それは、アメリカに対する黒人社会の感情の変化に対応し、そこからの支持を維持するためであった。本論文は、1984年と2008年の大統領選挙戦の比較を通してファラカンの非一貫性を分析し、その背景にあるものを明らかにするものである。

キーワード

ネイション・オブ・イスラーム（Nation of Islam）、ルイス・ファラカン、ブラックナショナリズム、アフリカ系アメリカ人の宗教史、アメリカ大統領選挙

はじめに

アメリカのイスラームセクトであるネイション・オブ・イスラーム（Nation of Islam、以下 NOI）は、1960年代後半の黒人解放運動の隆盛を宗教的側面から支え、現在でも黒人社会においてある程度の影響力を維持している。その要因として、ブラックナショナリズムを基盤にした教義と現在の指導者であるルイス・ファラカン（Louis Farrakhan）のカリスマが挙げられる。

マーサ・リーらの先行研究において、1984年の大統領選挙の民主党候補に公民権運動の指導者であったアフリカ系のジェシー・ジャクソンが出馬したことによって、NOIに変化が起きたことが指摘されている。¹それ以前のNOIは、アメリカへの不信から政治参与に消極的であった。ところが、史上初のアフリカ系アメリカ人の大統領が現れる可能性が生まれたことから、ルイス・ファラカンは、アフリカ系アメリカ人への政治参加を呼びかけるようになったのである。しかし、選挙期間中の彼の発言の内容は、過激すぎるという批判を受けることにもなった。彼がNOIの教義に見られる終末論に基づいた発言を行ない、アメリカの崩壊を警告してきたからである。

しかし、2008年の大統領選挙にバラック・オバマが出馬したことによって、彼の終末論的発言はアメリカの崩壊よりもその後起こる救済の側面を強調したものと変化していった。それまでの終末論では、救済の対象となるのは黒人を中心とする有色人種のみだったが、オバマの登場によって、黒人と白人の両方の民に正義がもたらされると発言したのである。

こうしたファラカンの発言の矛盾は、ジャクソンとオバマの方針の違いに起因するものである。特に、黒人社会とイスラエルおよびユダヤ系に対する立場は、アフリカ系アメリカ人およびイスラームの組織であるNOIにとって重要であり、これらの点に関してジャクソンとオバマは大きな違いを見せた。ジャクソンは黒人を中心にマイノリティーを優遇する政策を掲げた。そして、パレスチナの国家樹立を支持する立場を取り、それを妨害しようとするイスラエルを批判した。対するオバマは、人種の違いによって分裂することのない一つのアメリカという融和的な政策を強調した。そして、イスラエルがアメリカにとって最も重要な同盟国の一つであると明言し、ユダヤ系の人々は自分にとって、地元シカゴでの最大の支持層であると述べた。これらの違いにも関わらず、ファラカンはそれぞれの選挙戦において、両者を支持したのである。

本研究は、こうしたファラカンの政治的・宗教的非一貫性の背景にあるブラックナショナリズムの流れについて、1984年と2008年の大統領選挙を手がかりに考察するものである。この考察を通して、彼の非一貫的な政治姿勢の背景を明らかにすることが、本研究の目的である。言い換えれば、ファラカンと黒人社会や現在のブラックナショナリズムの流れとの間にある関係を分析し、彼の政治姿勢を評価しようとするものである。

本研究の持つ意義として、次の二点が挙げられる。まず、オバマの選挙戦によるファラカンの大きな変化を扱っている点で、本研究はNOI研究において最新のものだといえる。また、ファラカンの政治的非一貫性を現在のブラックナショナリズムの流れにおいて分析している点でも、先行研究では深く掘り下げられなか

った事柄を取り上げている。

本研究の構成は、以下の通りである。第一節では、ファラカンの政治的姿勢をより正確に理解するために、NOIの根底にあるブラックナショナリズムの歴史とアフリカ系アメリカ人とイスラームの関係史を紐解き、教団の歴史と教義について簡単にまとめる。第二節では、1984年の選挙戦によってNOIがどのように政治的に変化し、2008年の選挙戦ではオバマの登場によってファラカンの教義解釈にどのような矛盾が生じたのかについてまとめる。第三節では、ブラックナショナリズムがどのような変化を遂げて、現在の黒人社会と関わりあっているのかをまとめ、そのなかでファラカンがどのような立場をとっているのかを考察する。最後に、非一貫的に見えるファラカンの政治姿勢を評価する。

第一節 ブラックナショナリズムとネイション・オブ・イスラーム ブラックナショナリズムの形成

ブラックナショナリズムとは、アフリカ系の人々の抵抗運動が19世紀後半から思想として形成されていったものである。その思想に見られる重要な要素は、結束・連帯、文化遺産への誇り、自治(権)である。²アフリカ系アメリカ人たちの歴史的経験によって、彼らの感情は奴隷制に対する反乱や社会運動となって表されるようになり、ブラックナショナリズム形成の基盤となっていった。

彼らは自分たちの組織を形成し、厳しい現実には耐えられる人種的連帯感を生み出した。³その中でも、教会の果たした役割は極めて大きかった。⁴自治に関しては、奴隷制という制約があったために、教会などの限られた空間においてしか達成されなかった。しかし、自分たちが自ら治める土地を求める運動は奴隷制の初期から存在し、19世紀になるとその動きが本格化した。

20世紀に入ると、マーカス・ガーヴィーの創設した世界黒人向上協会(Universal Negro Improvement Association、以下UNIA)によって、大規模なブラックナショナリズムの運動が生み出された。UNIAは、黒人の人種的な誇りを高揚し、黒人大衆を結束させていったのである。⁵UNIAが成功した背景には、リンチなどの激しい人種差別から逃れるために大量の黒人労働者が北部へ移住してきたことが挙げられる。北部では少数の黒人エリート層を中心に、全米黒人地位向上協会や全米都市協会などといった組織が生まれたが、移住してきた労働層の支持を得られず、大きな成果を生み出せなかった。しかし、UNIAの運動は、労働層の意識や要求を反映させたことで、大きな運動を生み出すことができたのである。

また、UNIAのような大衆の感情に応える組織が同時期に多く形成され、宗教を背景としたものも多く存在した。⁶そのなかの一つが、NOIの形成に大きな影響を与えたムーア人科学寺院(Moorish Science Temple)であった。その指導者であ

るノーブル・ドゥルー・アリが 1929 年に亡くなり、その生まれ変わりを名乗る男が出現した。それが NOI の創始者であるファラッド・モハメッド (Fard Muhammad) であった。⁷

アフリカ系アメリカ人とイスラームの関係史

奴隷にされたアフリカ人のなかには、イスラームの影響が強い地域から連れてこられた者も多くいた。アフリカ人ムスリムたちはキリスト教への改宗を迫られたが、密かに日々の祈りを捧げるなどして彼らの信仰を守った。⁸しかし、アフリカにいたときと同じようにイスラームを実践できなかったため、黒人社会におけるその影響は薄れていった。

20 世紀に入ると、インドで興ったアフマディーヤ運動の宣教師によって、多くの黒人たちが感銘を受けて改宗していった。そして、ムスリムコミュニティの中で黒人が指導力を握るようになったことで、ガーヴィーの UNIA との連帯も強くなっていった。こうして、アフマディーヤ運動によって黒人を中心にイスラームへの改宗者が増えていったのである。⁹したがって、ムスリムとなったアフリカ系アメリカ人のなかには、ブラックナショナリズムに大きな影響を受けたものがいたことが容易に推測できる。NOI の創始者であるファラッドも、アフマディーヤ運動と UNIA に関わりを持ち、ムーア人科学寺院に出入りしていたことが指摘されている。¹⁰

ネーション・オブ・イスラームの成立と歴史

ファラッドは、1930 年に NOI の原型となる The Lost-Found Nation of Islam をデトロイトに創設した。ファラッドは、行商を通じて地元の黒人たちを NOI に改宗させていった。ファラッドは、黒人たちは本来聖なる都市メッカの民であると語り、彼らの先祖が信仰していた宗教はイスラームであると説いた。ファラッドの独特の風貌とそれまで聞いたことがないような話によって、NOI の信者は徐々に増えていった。¹¹

活動が広まるにつれて、ファラッドは白人とキリスト教に対する批判を始めた。活動を始めた頃、信奉者が慣れ親しんでいた唯一の聖典が聖書だったために、ファラッドは聖書を通して教えを説いていた。彼は導きの拠り所としての聖書を否定しなかったが、キリスト教の信仰による問題の解決や既存の聖書解釈を批判し、黒人の置かれた状況に対応するような新たな解釈の必要性を強調したのである。¹²そして、クルアーンが何よりも重要であると説いた。しかし、1934 年、ファラッドが突如失踪する事件が起き、イライジャ・モハメッド (Elijah Muhammad) が彼の後継者として、NOI の指導者となった。

イライジャ・モハメッドは、父と祖父がバプテスト派の牧師であり、聖書に精通していた。そうしたことから教団内で急速に頭角を現し、最高教師の地位に就いた。そして、ファラッドの失踪について、彼は神の化身であり、再臨の準備のために姿を隠したと説明した。さらに、自分自身は、神の再臨のときまで人々を導く預言者であるとした。こうしたファラッドの神格化やイライジャ自身の預言者としての位置付けが、他のムスリムから批判を受けている主な原因の一つである。しかし、ファラッド自身は自分をマフディー（救世主）だと語ったことはあるが、神の化身であるとしたことはなかった。¹³イライジャは、自分の預言者としての地位を確立し、後継者としての正当性を主張するために、ファラッドを「神」、「アッラー」としたのである。¹⁴

ファラッドを失った教団内部では、イライジャに対する不満などから分裂が起きた。身の危険を感じたイライジャはデトロイトを離れ、七年に及ぶ地下生活を送った。1942年、イライジャはシカゴに NOI の本部を移し、教勢を立て直そうとしたが、活動はなかなか軌道に乗らなかった。また、兵役拒否と市民を煽動した罪によって、イライジャは FBI に逮捕された。終戦後、釈放されたイライジャは教団の指導者として、NOI の教義を築いていった。そして、マルコム X の活躍などによって、教団は 1950 年代に急激に成長していった。

ネイション・オブ・イスラームの教義

イライジャは、神は霊ではなく人間の形となって現れるという神論を展開した。これによって、彼はファラッドの神性を正当化しようとしたのである。また、ファラッドが黒人の父と白人の母から生まれたことについて、次のような見解を示している。彼の母ゆずりの肌の白さと父ゆずり黒人としての風貌は、敵である白人の世界に潜り込んで彼らの行動様式を研究しながら、黒人社会に身を置いて彼らを救済の道に導くことを可能にするためであった。

ブラックナショナリズムを基盤とする NOI は、独特な教義を形成していった。その独自性は、教義に示される歴史観に顕著に現れている。地上に現れた最初の民族である「シャバズの民」は黒人で、ナイル川の流れる谷に居住し、後にメッカを築き上げた。創世記 15:13-14、使徒言行録 7:6-7 にあるように、アブラハムがアジアの黒い民の父となったとしている。アメリカの黒人は、黒い民の祖となったシャバズの民の直系である。そして、この黒い民に含まれるのは、全ての非白人たちである。

また、白人の誕生については、ヤクーブ（Yakub）という黒人科学者によって白人が創り上げられたと説明している。彼は異なる人類を創り出すことで、人々

を支配しようと計画していた。危険分子と見なされヤクーブは、彼の 5999 人の信奉者と共にパトモス島に流されてしまった。メッカから追放されたヤクーブは、パトモス島で六百年の時間をかけてその島の人々との配合を繰り返した。この配合により様々な色の人種が生まれ、最終的に嘘や欲などの人間としての弱みが結集されて創り出されたのが白人である。ここに、白人は悪魔であるという NOI の教義の原点がある。

白人はパトモス島から聖なる土地であるアジアに移り、黒人の間に争いをもたらした。これを知った聖なる土地の統治者は、白人をヨーロッパへと追放した。これが、およそ六千年前の出来事である。ヨーロッパに移った白人は、洞穴に住みながら獣のように暮らすようになった。神はモーセを使わせ、白人に文明をもたらそうとしたが不可能であった。

ところで、白人たちの到来によって、争いの絶えなくなった黒人を見た神は、白人に世界を六千年統治させることにした。神は、黒人が本来の霊的資質を取り戻し、白人が正義によって世界を治められるかを試そうとしたのである。しかし、白人には正義によって世界を統治する能力は無く、非白人を支配しながら、より悪に満ちた世界を築いた。そして、六千年の猶予期間は終わり、黒人を救うためにこの世に神と預言者が現れた。それが NOI の創始者のファラッドと後継者のイライジャである。彼らは、悪魔である白人の支配から黒い民を救済するためにシャバズの民の直系の子孫であるアフリカ系アメリカ人のもとにやってきた。アフリカ系アメリカ人は、アジアの黒い民を救済し、悪魔である白人の文明を破壊するために、神によって選ばれたからである。

NOI では、創世記 15:12-21 によって、黒人たちが神とアブラハムの契約を満たす人々であるとしている。彼らの救済の最初の段階として、預言者であるイライジャ・モハメッドは、アメリカの黒人に彼らの歴史、宗教、神について教えるためにやってきた。こうした自分たちに関する正しい知識を獲得することが天国にある状態であり、白人たちによって与えられた間違った知識を身につけたままの状態が地獄であると考えられた。こうした現世的な天国・地獄の理論は、NOI の教義の特徴である。つまり、NOI の教義では、自分たちの歴史、神、民族について無知だった状態から抜け出し、本来のアイデンティティーを取り戻すことが神の国につながる救済なのである。¹⁵

NOI の終末論も、聖書、特に黙示録に拠った独自の解釈によって展開されている。最後の審判では、全ての人類が滅ぼされるわけではなく、アメリカの崩壊によって悪魔である白人たちと彼らの宗教であるキリスト教の破壊が起きるのである。そして、その後に神が世を支配する至福千年が訪れるのである。しかし、終末論を含めたイライジャの築いた教義は、時代やアフリカ系社会の感情の変化に

対応するために、ファラカンによって異なる解釈が行なわれるようになった。

第二節 1984年と2008年の大統領選挙とルイス・ファラカン

1984年の大統領選挙とネイション・オブ・イスラームの政治的転換

NOIの独自の教義を築いたイライジャ・モハメッドは、1975年に亡くなった。イライジャの後を継いだ息子のワリス・ディーン・モハメッド（Warith Deen Mohammed）は、それまでの教義を一切排除し、スンナ派へと移行していった。そして、教団名も World Community of al-Islam in the West へと改称された。しかし、現在のNOIの指導者であるルイス・ファラカンは、ワリスの方針では黒人社会が抱える問題に対処できないと考え、教団から離脱し、1978年にNOIの再建に乗り出した。ファラカンは、イライジャの築いた教義を復活させながらも、徐々にイスラームの教義も取り入れていった。NOIは、彼の尽力によって1983年には機関紙である *Final Call* を毎月発行できるまでに教勢を取り戻した。

しかし、それまで静かに教勢を延ばしてきたNOIは、1984年の大統領選をきっかけに大きく変化していくこととなった。それまでのNOIは、イライジャの教えを受け継ぎ、アメリカの政治は単に黒人を支配するための仕組みであると考え、政治参加に消極的であった。しかし、1984年の大統領選の民主党代表候補に、ジェシー・ジャクソンが名乗りをあげると、ファラカンは彼に対する支持を積極的に示した。

ジャクソンが民主党大統領候補に選出される可能性が高いと感じたファラカンは、それまでのNOIの伝統からは考えられなかった見解を示した。彼は、「白人は幼稚な行いから脱却できる可能性がある。そして、我々が我々自身の内に神の力を再発見するとき、彼らの中の悪が徐々に姿を消すことになるだろう」と発言した。¹⁶それまでとはうってかわった融和的な発言によって、ファラカンはNOIの教義から離れていっているように見えた。しかし、こうした楽観的な発言は一時的なもので、彼の発言は大統領選挙においてジャクソンの形勢が悪化することによって変化を見せた。また、彼の「ユダヤ教は貧民街の宗教である」という発言は、メディアから批判を受けるなどして物議を醸した。¹⁷

このような状況の中で、ファラカンは初めて黒人教会の指導者たちの会議に参加した。この会議で、それ以降のファラカンの終末論の特徴となる、非ムスリムを含む黒人社会全体を意識した包括的な表現が現れるようになった。¹⁸ファラカンは、NOIの教義を通しての救済を強調するよりも、「経済的救済において、教会が黒人にとって最後の望みである」と述べ、黒人社会における教会の役割を評価した。¹⁹これらのことから、イライジャ時代のNOIが、キリスト教を白人の宗教として批判したのに対して、ファラカンは黒人社会全体の連帯を優先するため

に、キリスト教に寛容な立場を取るようになったという推測ができるだろう。あるいは、黒人社会における支持基盤を拡大するために、黒人教会との連帯を図ったとも考えられる。

予備選挙が終盤にさしかかると、ファラカンの終末観は、政治情勢に左右されたものとなっていった。そして、彼の発言は NOI 信者のみに向けられたものではなく、全てのアメリカの黒人の関与を想定し、さらにイスラーム世界を視野に入れたものだった。しかし、ファラカンの発言に見られる終末論は、ジャクソンの形勢が悪化するにつれて、アメリカの崩壊という NOI の従来からの教義を強調したものになっていった。²⁰

1984年4月には、「アメリカの崩壊は目前に迫っている。(中略)そして、新たな福音を受けるための準備として、世界中の権力は滅ぼされるであろう」というコメントを出している。²¹その一週間後には、ジャクソンが落選すれば、黒人の一軍を率いて、新大統領に黒人のための分離された領土を要求することを表明した。²²しかし、最終的に、ジャクソン側からファラカンへの批判があがり、両者は訣別した。ジャクソンは南部の州を中心に票を集めたものの、予備選挙に勝利することができなかった。

ジャクソンの選挙戦敗北後の NOI は、黒人教会およびイスラーム世界との連帯を強化しようとする傾向を強めていった。黒人の大半が属する黒人教会と連帯することによって、黒人社会への影響力を強化し、イスラーム世界からの資金援助によって黒人社会の要求に応えられるような事業を興すことがファラカンの目的だったのである。こうして、1984年の選挙をきっかけに、ファラカンは黒人社会における影響力を一気に強めていった。

ファラカンと 2008 年大統領選挙

1984年の大統領選挙を契機に、黒人社会での影響力を強めたファラカンだったが、2008年大統領選挙では、それまでには考えられなかった教義解釈を行なった。それは、オバマとジャクソンの政治姿勢の違いによるものと考えられる。ファラカンは、ジャクソンの選挙戦の終盤において、アメリカ崩壊の側面を強調した終末論を展開した。しかし、オバマの選挙期間中は、終末の後に起こる救済の側面を強調した終末論が基調となっていた。

まずファラカンは、NOI の創始者であるファラッドのアイデンティティーに新たな解釈を示した。NOI の伝統的な解釈では、ファラッドが白人の母から生まれたのは、母親ゆずりの肌の白さによって、敵である白人の世界に潜り込み、彼らの行動様式を学ぶことを可能にするためであるとされていた。しかし、2008年の選挙戦では、ファラカンによって、ファラッドの父が黒人で母が白人であるのは、

彼が両方の民に正義をもたらすことを可能にするためであった、という見解が示された。²³これは、オバマ自身がファラッドと同じように、黒人の父と白人の母の間に生まれたことを意識したうえでの発言だとも考えられる。

The Gods at War と題されたスピーチで、ファラカンは、天災や金融危機などアメリカが直面する問題に触れたうえで、アメリカの終末を警告している。²⁴そして、このような状況の中で現れたオバマを、救世主の再臨を伝える使者であると喩えた。つまり、オバマの働きによって、アメリカの多様な人種・民族的背景を持つ人々の融和が起これば、ファラッドが黒人と白人の両方の民に正義をもたらすための準備が整うというのである。ジャクソンが出馬したときの終末論は黒人社会全体を意識したものだったが、ここではアメリカ社会全体を意識したものに変化している。こうしたファラカンの終末論の変化は、黒人社会を意識したジャクソンと、アメリカを一つに統合することを強調したオバマの違いに起因していると考えられる。

しかし、ファラカンは、このスピーチの目的はオバマへの投票を呼びかけるものではないとした。オバマを賞賛したことによって、メディアがファラカンを引き合いに出し、オバマ候補にマイナスイメージを与えようとするだろうと予想したからである。その予想通り、このスピーチの二日後に行われた民主党候補者による討論会では、司会者はオバマにファラカンからの支持を受け入れるかとの質問を行った。オバマは、ファラカンの以前からの反ユダヤ的発言を非難し、ファラカンに支持を求めたことはないと述べた。しかし、彼からの支持を受容するかについては言及を避けた。²⁵さらに、オバマの所属する教会の牧師であるジェレマイア・ライトがファラカンを「偉大な人格を集約したような人物」と賞賛したことと関連して、オバマはファラカンの反ユダヤ主義的発言を承認したのか、ユダヤ系の人々とイスラエルについてどう考えるのかという質問を受けた。これに対して、オバマは、イスラエルはアメリカの最も重要な同盟国の一つであり、地元シカゴでの彼の最も大きな支持層はユダヤ系であることを強調した。

もっとも、オバマはファラカンを非難しつつも、ライトのファラカンに対する賞賛について否定しなかった。それは、ファラカンが NOI の信者だけでなく、多くのアフリカ系アメリカ人に対して大きな影響力を持っていると、オバマが判断したからだろう。しかし、翌月にインターネットでライトの「神よ、アメリカを呪いたまえ (God damn America!)」という昔の説教が流された時、オバマは他候補からの批判を避けるためにライトの教会から離れていった。ファラカンはオバマがライト牧師と訣別したにも関わらず、続けてオバマ支持を表明した。

ジャクソンとオバマの相違点とファラカンの立場

ジェシー・ジャクソンとバラック・オバマの両者は、選挙戦のなかで全く違った政治的立場や方策を示した。本来の NOI の教義からすると、ファラカンがジャクソンを支持したことは理解に難くない。ブラックナショナリズムを背景にする NOI にとって、アフリカ系アメリカ人を優遇する政策を前面に押し出していたジャクソンを支援するのは当然のことだともいえるだろう。また、パレスチナの国家樹立を主張し、それを妨害しようとしたイスラエルを批判したジャクソンの立場も、イスラーム組織としての NOI の姿勢に合致したものだ。イスラエルを批判するジャクソンを支持したのは、ファラカンがイスラーム世界との連帯を重要視したために、イスラーム組織としてのアイデンティティを強調しようとする意図があったと考えられる。

対するオバマは、多様な人々によって構成されるアメリカを融合することを掲げ、地元の最大の支持層がユダヤ系であると公言し、イスラエルがアメリカの最も重要な同盟国の一つであることを強調してきた。オバマのこうした立場は、本来の NOI の教えと合致するところがない。アメリカとの対決姿勢を見せてきた NOI の指導者であるルイス・ファラカンが、その教えに見合わない人物を支持するところに彼の非一貫性が見られる。

こうしたファラカンの非一貫性の背景には、黒人解放運動の減退とともに陰を潜めていったブラックナショナリズムが、1980 年代に再浮上してきたことが挙げられる。しかし、ブラックナショナリズムは、第一節で述べた 20 世紀初頭の頃のものから変化を遂げてきた。このブラックナショナリズムの変化も、ファラカンの非一貫性に大きな影響を与えたと考えられる。

第三節 ブラックナショナリズムの再浮上とルイス・ファラカンの台頭

ブラックナショナリズムの多様化

ブラックナショナリズムは、奴隷制への抵抗、そして差別や搾取への反発として 19 世紀に形成された思想である。その思想の中心としてブラックナショナリストたちが一つの最終目標に掲げたのが、アフリカへの回帰や自治領の確立であった。しかし、1960 年代後半に公民権運動の行き詰まりによって再燃したブラックナショナリズムは、ブラックパワー運動の隆盛とともにその形態を多様化させていった。²⁶1960 年代終わり頃から現れた様々なグループは、文化、宗教、自治、教育などの異なった観点から、それぞれの運動を展開するようになっていったのである。²⁷また、これらのグループのアメリカに対する立場にも、大きな幅が生まれた。こうして多様化を見せたブラックナショナリズムだったが、1970 年代中頃にブラックパワー運動が減退していくに伴って、その勢いは衰えていった。

ルイス・ファラカンの台頭

しかし、1980年代中頃から終わりにかけて、ブラックナショナリズムが再び勢いを取り戻した。その要因として、それまでの黒人社会には見られなかった新たな社会問題が現れたことが挙げられる。黒人男性の囚人人口の増加や薬物の蔓延などといった問題である。ファラカンは、NOIの活動を通して、これらの問題に積極的に関わる姿勢を見せた。そして、黒人教会との連帯を強めたことによって、NOIの信徒だけでなく、黒人社会からより多くの支持を獲得するようになった。

その結果、ファラカンは、多様化したことによってまとまることができなかったブラックナショナリズムの中心的なリーダーとなることができたのである。それを示したのが、「黒人男性による百万人の行進 (Million Man March)」(1995)であった。²⁸この一大イベントは、ファラカンの呼びかけによって開催された。そこにはNOIの信者やアフリカ中心主義をかかげる組織のメンバーだけでなく、様々な背景からなる黒人男性が参加した。この行進にほぼ百万人の黒人男性が参加したことから、NOIが黒人社会において大きな影響力を獲得したことが読み取れる。

黒人社会から大きな支持を得たNOIは、独立した資金源を確立し、大企業などの出資者によって拘束を受けるメディアや宗教団体には見られない自由な発言力を得たのである。²⁹NOIの機関紙である*Final Call*は、ファラカンのメッセージだけでなく、ブラックナショナリストを中心とする黒人社会の運動やムスリムにとって重要な情報を発信している。また、ファラカンは、アフリカ系アメリカ人の社会的向上や経済的自立を目指す事業に積極的に取り組んでいった。これらの活動には、黒人社会からの支持を確立することで、教団の態勢を維持させる目的があったことも否定できない。

しかし、時代の流れのなかで黒人社会のアメリカに対する感情は常に変化し、それに即した発言をするために、教義解釈に幅を持たせる必要が生まれた。また、教義解釈に幅をもたせることで、多様化したブラックナショナリストたちをまとめることができるようになったといえるだろう。このような背景から、ファラカンの発言や教義解釈に非一貫性が生まれたのである。

おわりに

ファラカンは、1984年の選挙をきっかけに、黒人社会での支持基盤を拡大し、ブラックナショナリズムのリーダーへと成長した。そして、黒人社会からの支持によって、教団を経済的に自立させることに成功した。それによって、他から拘束を受けることのない自由な発言力を得た。しかし、黒人社会からの支持によって成り立つNOIの態勢を維持させるために、時代によって変化する黒人社会の感

情に即した見解を発信していくことが必要にもなった。つまり、黒人社会がアメリカに大きな期待を寄せるとき、ファラカンもアメリカへの対決姿勢を軟化させ、黒人社会がアメリカに批判的なときには、ファラカンはその先頭に立ってアメリカ社会を厳しく批判するのである。こうした背景から、ファラカンの発言に非一貫性が生じるのである。だからこそ、ジャクソンの形勢が不利になったときには終末を警告するような発言をし、オバマの選挙戦においては彼の融和的な政策に合わせた発言を行ったのである。

一方で、ファラカンの教義解釈に非一貫性が生じたもう一つの重要な背景には、ブラックナショナリズムの多様性があると考えられる。前述のように、アフリカ系アメリカ人やブラックナショナリズムの流れのなかに、様々なアプローチや政治理念が存在してきた。非一貫的に見えるファラカンの姿勢は、これまでまとまることのできなかつたブラックナショナリストたちを一つにし、相互に協力しあえるようにするうえで必要だった。教団の態勢を維持する以上に、黒人社会を憂えるファラカンは、多様化したブラックナショナリズムの指導者たちが分裂していることを問題視していたのではないだろうか。多様な背景を持つ黒人男性が集まった「100万人の大神進」において、ファラカンはアメリカ合衆国憲法の前文にある“a more perfect union”という言葉を用い、分裂状態にある黒人社会の結束を呼びかけた。³⁰ファラカンは、ブラックナショナリズムが重要視する黒人の結束無しでは、かれらの直面する問題の解決に至ることが難しいと痛感していたのである。そして、多様化したブラックナショナリズムをまとめるために、その中心的存在であるファラカンは、発言や教義解釈に幅を持たせる必要があったといえるだろう。

註

¹ Martha Lee, *The Nation of Islam: An American Millenarian Movement* (Syracuse University Press), 1996; Clifton E. Marsh, *From Black Muslims to Muslims: The Resurrection, Transformation, and Change of the Lost-Found Nation of Islam in America, 1930-1995* (2nd Edition), The Scarecrow Press, Inc., 1996.

² Alphonso Pinkney, *Red, Black, and Green: Black Nationalism in the United States* (Cambridge University Press, 1976), pp. 6-7.

³ 自由州であった北部では、Free African Societyのような共済組合やアフリカン・メソジスト監督教会のようなアフリカ系のキリスト教派が生まれた。南部では、アフリカ系のキリスト教徒による反乱が多発していたので、アフリカ系の人々のみで礼拝を行なうことが禁止されていた。

⁴ E.U. Essien-Udom, *Black Nationalism: A Search for an Identity in America* (The University of Chicago Press, 1962), pp. 24-25.

⁵ Pinkney, *Red, Black, and Green*, p. 56.

⁶ *Ibid.*, pp. 209-210.

⁷ Muhammad の日本語表記は、NOI 信者の発音にならってムハンマドではなく、モハメッドと表記することにする。また、Fard は、ファードではなく、ファラッドと発音される。

⁸ Michael A. Gomez, *Black Crescent: The Experience and Legacy of African Muslims in the Americas* (New York, NY: Cambridge University Press, 2005), p. 59.

⁹ *Ibid.*, Ch. 4.

¹⁰ *Ibid.*, p. 278.

¹¹ オーストラリアでパキスタン系の父とイギリス系の母の間に生まれたファラッドだったが、デトロイトの人々には、黒人の父と白人の母の間に生まれたと語った。



実際のファラッド・モハメッド (Karl Evanzz, *The Messenger: The Rise and Fall of Elijah Muhammad* (New York, Pantheon Books, 1999), p. 112 と p. 113 の間の付記参照)。

¹² Gomez, *Black Crescent*, p. 281.

¹³ イスラームにおいて、マフディー (救世主) とは「神意により正しく導かれた者」(『岩波イスラーム辞典』) を指す。イスラーム初期においては、預言者ムハンマドを指していたが、近現代のコンテキストにおいては、イスラーム法に則って混乱した社会や宗教に秩序を復活させようとする運動の指導者がマフディーとされることがあった。

¹⁴ Gomez, *Black Crescent*, p. 287.

¹⁵ Essien-Udom, *Black Nationalism*, p. 137.

¹⁶ Martha F. Lee, *The Nation of Islam: An American Millenarian Movement* (Syracuse, NY: Syracuse University Press, 1996), pp. 79-80.

¹⁷ *The New York Times*, June 29, 1984, A12. See Lee, *The Nation of Islam*, p. 80.

¹⁸ Lee, *The Nation of Islam*, p. 81.

¹⁹ *The Chicago Tribune*, April 10, 1984. See Lee, *The Nation of Islam*, p. 81.

²⁰ Lee, *The Nation of Islam*, p. 82.

²¹ *The Chicago Tribune*, April 15, 1984, V, p. 1. See Lee, *The Nation of Islam*, p. 82.

²² *The Chicago Tribune*, April 22, 1984, III, p. 1. See Lee, *The Nation of Islam*, p. 82.

²³ Louis Farrakhan, Feb. 24, 2008. “*The Gods at War: The Future is All About Y.O.U.t.h.*”

²⁴ *Ibid.*

²⁵ <http://jp.youtube.com/watch?v=sHEyCnj0vMw> (2009年12月18日アクセス)

²⁶ Pinkney, *Red, Black, and Green*, pp. 13-15.

²⁷ *Ibid.*; Van Deburg, *Modern Black Nationalism*, pp. 14-15.

²⁸ この行進の目的は、アメリカ全土のアフリカ系アメリカ人の男性が一同に会することで、その多様性を伝え、アフリカ系アメリカ人を疲弊させている経済的・社会的な悪に立ち向かうための協調態勢を築くことであった。しかし、この行進に対して、アフリカ系アメリカ人フェミニストたちから批判の声があがった。

²⁹ ファラカンの講演会での莫大な献金や *Final Call* の売り上げなどを通して、教団の活動資金が集められている。

³⁰ Louis Farrakhan, *Remarks at the Million Man March*, Oct. 17, 1995.

<http://www.africawithin.com/mmm/transcript.htm> 参照。